



いのちの森づくりプロジェクト「鎮守の社安全祈願祭」

こころの扉—「人とつながること～

CommuniHeartプロジェクトにかかわって」 鷺尾龍華	2
人身取引防止タスクフォース オンライン学習会を開催	3
和解の教育タスクフォース 和解のセミナー開催	4
ウクライナ難民支援活動レポート	5
いのちの森づくりプロジェクト「鎮守の社安全祈願祭」	6
平和研究所第4回研究会	7
ミャンマーへの人道支援	7
WCRP国際活動支援議員懇談会の勉強会を開催	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8

「人とつながること～CommuniHeartプロジェクトにかかわって」

一昨年の十二月、S状結腸がんで九年間の闘病の末、私の父は七十五歳の生涯を閉じました。私はただ一人の子どもでしたので、自覚している以上にとてもかわいかったもらったのだらうと思います。生前には気がつかなかった愛情を、亡くなってから思い出すことがたくさんありました。

たくさんさんの弔問の中で、色々な人から父の思い出話を伺いました。そこには私知らないエピソードがいくつもありません。中には、今の自分があるのは父のおかげとまで言うてくださる方もおられました。私は衝撃を受

会事山主
委員大座
本部宗寺
WCRP日本
青年真言
青東寺山
石

鷺尾龍華



けました。多岐にわたる父の逸話に、父という一人の人にはたくさんさんの顔があったのだと気がついたのです。

心理学では「ペルソナ」を説きますし、作家の平野啓一郎氏は「分人主義」を提唱しました。分人主義とは、その時々の相手や環境に合わせて、自分自身が別の人間（分人）になるということです。そして、そのときの自分を「分人」と呼ぶのです。ペルソナが「本当の自分」を使い分ける仮面であるのに対し、分人主義ではすべての人に接している時の自分が「本当の自分」とされま

れていたのでしよう。そしてその大部分を私は知らなかった。「本当の自分」というのは一体なんなのか。実は存在すらしなのかもしれない。そして、一人の人と長く過ごしたからといって、その人の「本当の自分」を知ることが、きっとできないのだらうと思えました。

コロナ禍の真つ最中、WCRP日本委員会青年部会の女性メンバーを中心に、「CommuniHeartプロジェクト」を立ち上げました。コロナ禍で女性の自殺率が増えたことをきっかけに、若手の女性を対象にしてコミュニティを作り、「女性の生きづらさ」に焦点をあてた活動をしようというものでした。

この活動は、まずは事務局メンバーが自らの内面を話すことから始まりました。この作業を通じて私たち自身がまずつながることができました。話す人も聞く人も、自然と涙がこぼれました。皆、色々な苦しみを経験してきたこと。そして自分の話を聴き、涙をこぼしてくれる人がいることに、大きな救いを感じた時間でした。

第一回では宗教とともに生きる女性が多く参加されました。異なる宗教を信仰していても、心からのつながりを持つことはできるのだと、大きな気付きをいただきました。

私の晋山の日、プロジェクトメンバーが皆で綺麗なお花を贈ってくれました。メンバーのあたたかな心に培われたつながりは、私の人生の大切な時に励ましと勇気をくれました。一人の人のすべてを知ることができなくても、「本当の自分」がわからなくても、その瞬間に何かを与えあうことができると。そのことは今も私を支えてくれていますし、私も誰かを支える人でありたいと、心から願っています。

人身取引防止タスクフォース オンライン学習会を開催

人身取引防止タスクフォースは、『宗教者としてののちの尊厳について考える』国際人権とSDGsの視点から人身取引防止を目指して』をテーマに7月1日、オンライン学習会を開催。これに85人が参加した。

目的は、宗教者としてつながらあうのちに気づき、人が持つて生まれた「いのちの尊厳」を考え、人身取引防止のために私たちに何ができるかを共に考える機会とすること。学習会では、同タスクフォースの宍野史生責任者（神道扶桑教管長）が開会あいさつを述べたあと、国際的な人権規範や持続可能な開発目標（SDGs）の達成といった、広く社会で共有された価値観と照らし合わせながら、人びとが慈しみ合い、よりよい社会を構築するための一助となるよう、信仰を基盤とした団体で人身取引防止に関する活動を行っている4人が活動発表に立った。

はじめに、カトリック大阪教区社会活動センター・シナピス事務局のビスカルド篤子氏が登壇。1980年代から在留外国人の生活支援を行っていることや、行政との連携の経験を踏まえ、「人身取引というテ

マに対してひるんでしまいそうになるが、いったん相手を受け入れて聞かせていただくことが大事」と支援の心構えを説いた。

救世軍人身取引対策室の石川節子室長は、2年前から救世軍の日本国内での活動が始まったことに触れつつ、日本が人身取引の課題に早急に取り組む意義を述べた。

また、「現代奴隷制とも言われる技能実習制度および人身取引との戦いの土台となるものは、祈りである」と強調。そして、他団体と連携しながら新宿・歌舞伎町の夜回りで出会った困窮する在留外国人の事例を挙げ、寄附や相談する場の必要性を訴えた。

在日ベトナム仏教信者会代表理事で、大恩寺ベトナム寺院（埼玉県本庄市）のティック・タム・チー住職は、コロナ禍の影響で職を失った技能実習生を含む在日ベトナム人への支援活動を紹介。加えて、日本とベトナムの死者の弔い方の違いから、家族を亡くした在日ベトナム人が遺体を河原に埋葬し、逮捕されてしまった事例を紹介。

彼らへの精神的なケアと、あらためて葬儀を行ったことに触れ、「日本の政府や受け入れ機関で、文化・習慣の違いを事前に伝えておいてほしい」と語った。

WCRP日本委員会の篠原祥哲事務局長（アジア宗教者平和会議ACRP）事務



パネルディスカッション

総長兼任）は、ACRPが2019年から人身取引防止のためのセミナー、e-bookの発行を行ったことや、2020年からWCRP日本委員会では本タスクフォースを立ち上げ、日本政府への提言や現地視察、記者会見などを行っている様子を紹介した。

続いて行われたパネルディスカッションでは、7月30日の「人身取引世界反対デー」に向けて登壇者らが意見交換を行った。この中で、人身取引防止に関して、政府の窓口が不明瞭で、責任の所在が見えにくい現状はあるが、働きかけを継続していく重要性を再確認した。



同タスクフォースでは、7月30日の「人身取引反対デー」によせて、今回の学習会のダイジェスト動画を作成。詳細はWCRP日本委員会ホームページまで。

和解の教育タスクフォース

和解のセミナー開催

『戦争から和解と平和のプロセスへー私たちに何ができるのか』をテーマに、和解の教育タスクフォース主催のセミナーが7月22、23の両日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京・渋谷）で開催され、37人が参加した。

同セミナーは、ロシアによるウクライナ侵攻のみならず、世界中の紛争や戦争によって傷ついた尊い「いのち」について考え、平和と和解へのプロセスについて学び、私たちに何ができるのかを考える機縁とすることが目的。

総本山極楽寺教学部の村上泰教部長が講師を務めた。

松井教授は、構造的な暴力や分断された社会に対して、平和な「共生」社会を築くための「対話」の重要性を強調。

村上部長は、「対話」をするにはまず自己理解を深め、自分の心を整えてから傾聴する必要があると述べ、参加者はグループワークを通して「対話」の基本姿勢を学んだ。

また、戦争の現実や支援の課題について、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）モルドバ代表のフランチェスカ・ボネリ氏がオンラインでスピーチを行った。

ボネリ氏は、ウクライナの隣国であるモルドバが積極的にウクライナ難民を受け入れている背景や、モルドバ政府と協働で行っている現金給付などの経済的支援、障がい者や親を亡くした子どもへのサポートなどの活動と受け入れ状況について詳述した。その後、参加者との質疑応答が行われた。

23日には、日本YMCA同盟の横山由利亜氏が、『日本で暮らすウクライナ避難者の現状から』と題して、同団体がウクライナ難民を日本で受け入れ、生活支援に取り組



22日のセッション『平和と戦争、そして和解』の導入では、同タスクフォース運営委員である清泉水子大学の松井ケイ教授と、石鎚山真言宗



んでいる様子を紹介。支援を始めた当初は来日の段取りと緊急支援が必要とされていたが、戦争の長期化に伴い、日本での避難生活が長引くにつれて生活に疲れ、体調不良を訴える人も出てい

中で、「日本の行政や自治体のルールを理解してもらう前に、相手の文化や気持ちを含み、理解することが大切だ」と語った。

最後のセッションでは、参加者が五つの班に分れて「私たちに何ができるのか」について話し合い、班ごとに意見をまとめて発表した。

参加者からは「自分の中にある『小さな分断』や偏見に気づき、それを埋めていくことが大事なんだと思った」「『見たいと思う世界の変化に、あなたがなりなさい』という言葉が印象的だった。まずは自分自身が変わっていくことからすべてが始まるのだと学んだ」などの感想が聞かれた。

ウクライナ難民支援活動レポート

WCRP日本委員会が財的支援を行った次の二つの団体より活動レポートが寄せられました。要約して報告します。

■ Mudra Sprava

(ムドラ・スプラヴァ)

ウクライナ・ギリシャ・カトリック教会(UGCC)の慈善団体である「総主教基金ムドラ・スプラヴァ」は、一時避難民、難民、困難な生活環境にあるウクライナ人に対し、最も必要とされる支援活動を行っています。



その柱の一つが、食料パッケージプロジェクトです。地元の食品メーカーと協力し、必要なカロリー数で、小麦粉や肉・魚の缶詰、お菓子など13品目、総重量8.5キロ、2人が1週間過ごせる食品セットを開発しました。この取り組みは、食品会社の生産及びコミュニケーションの維持に寄与しています。WCRP日本委員会から寄せられた5万ドルによ



村)に届けられました。

支援を受けた人びとからは単なる感謝だけではなく、生きる意欲に関する感謝の言葉が寄せられています。私たちも、食料や物質的支援だけでなく、より安全で充実した生活への喜びと希望を与えることができたと自負しています。このWCRP日本委員会との共同プロジェクトは、成功したと自信を持って言えます。

さらに重要なことは、このプロジェクトは、隣人への奉仕という文脈の中で、霊的な側面も獲得しています。愛を共有することで、感謝の気持ちが生まれ、勝利への希望が強まります。

ウクライナのために祈りを捧げるとともに、今後もよろしくお願いいたします。

■ Eieos-Ukraine

(エリオス・ウクライナ)

私たちは、WCRP日本委員会から寄せられた5万ドルの資金を次の三つのプロジェクトに活用しています。

まず、プリカルパティア州のカルーシ地区警察署内に「グリーンルーム」を設置しました。グリーンルームでは、心理学者と警察官の支援のもと、被害を受けた女性、妊婦、未成年の子どもたちに対するケアが行われています。

二つ目は、ケルソン戦争被害者支援センターの設置です。支援センターでは、ソーシャルワーカー、弁護士、心理学者らが連携し、戦争の被害にあった人びとの人権保護と支援を行っています。

三つ目は、このレポート作成中に、カホフカ水力発電所のダムが爆破され、流域一帯が洪水に襲われ、住民の生命が脅かされていると報じられました。私たちは即断し、残りの資金をエリオス・ヘルソンに送り、支援活動を始めました。

私たちは、神によってそこに遣わされたのであり、WCRP日本委員会から寄せられた資金を被災者支援のために使わせていただき、大変感謝しています。

いのちの森づくりプロジェクト 「鎮守の社安全祈願祭」

気候危機タスクフォースは7月14日、埼玉県所沢市にある「WCRPいのちの森」で「鎮守の社安全祈願祭」を挙行了した。同タスクフォース委員や「いのちの森」を共同管理する「堀口天満天神社周辺緑地を守る会（代表・中村明氏）」をはじめとする周辺の土地所有者ら約20人が参列した。

これは、同タスクフォースが展開している「WCRPいのちの森づくりプロジェクト」の活動の一環として行われたもので、「いのちの森」の頂には、もともと古くから小さな祠（ほこら）があり、風雨などによる破損が激しかったことを考慮して、2020年7月14日に祠を新たに鎮座したことに由来する。

1万平方メートルの丘陵地で展開してい



鎮守の社の祠

る「いのちの森づくりプロジェクト」では、これまで森の保全のための下草刈りや倒木竹の焼却、植樹などを行っている。それらの活動の安全に向け、祈りが捧げられた。式典は神道の儀式に則り、堀口天満天神社を祭祀する朝日和久師（中水川神社禰宜）を齋主に厳粛に執り行われた。修祓の儀、齋主一拝、祝詞奏上、四方祓、齋主玉串のあと、参列者一人ひとりが玉串を奉納した。

最後に、田中庸仁気候危機タスクフォース責任者（真生会会長）があいさつし、土地所有者への感謝と「いのちの森づくり」の意義を述べた。



式典の様子



集合写真



玉串を奉納する田中責任者

平和研究所第4回研究会

木村護郎クリストフ氏

平和研究所の第4回研究会が7月24日、普門メディアセンター（東京・杉並）でオンラインを併用し開催された。上智大学外国語学部の木村護郎クリストフ教授が外部招請講師として『平和のための〈対話〉における宗教の役割〜ドイツ・ポーランドの和解への道から〜』をテーマに発表した。

1939年9月1日のドイツ軍によるポーランド侵攻によって、第二次世界大戦が勃発。その後ポーランドでは、6年におよぶ占領期に、アウシュビッツに代表されるユダヤ人虐殺や、知識人・指導層を含む多くのポーランド人の殺りく、強制労働などが行われた。

一方、ドイツは1945年5月の敗戦とともに、東部地域がポーランドの管理下に置かれた。これによってドイツは戦前の国土の4分の1を失い、1千万人に上る住民が強制追放された。



上智大学木村教授

こうした背景を経た両国は、互いに憎み合っていた。そのような中で、戦後の両国の和解に向けた里程標として、木村教

授は二つの文書を紹介。それはドイツ福音教会が1965年に出した『東方覚書』と、同年にポーランドのカトリック司教団がドイツの同胞に送った『声明』で、自らの正統性を主張するだけではなく、互いに加害者であり被害者であるという立場を認識し、今後の関係を築くためには妥協が必要であることを示したものだ。

両国民から批判も受けた文書であったが、木村教授は「批判を招いたことが逆に両国家間の膠着状態をほぐし、議論を始めるときかけになった」と指摘。互いに「救いの精神」の尊さを説き続けたことで、「共に自分たちの過去と向き合うことができ、和解の一步が踏み出せた」と語った。そして「国家機関が機能しないときこそ、政治外の宗教的言説を政治的、社会的な課題に応用することが重要で、そのことによって宗教が和解構築の役割を果たすことができた」と述べた。

ミャンマーへの人道支援

WCRP日本委員会は、ミャンマーで軍事クーデターが起きた2021年から、WCRPミャンマー委員会を通して、混乱状況の中で生活に困難をきたしている人びとに対して、生活必需品の配布やメンタルケアなどの人道支援を行っている。

8月1日、同ミャンマー委員会より、4月から6月にかけて実施された事業の報告書が同日本委員会に届いた。

それによると現在、政府軍といくつかの過激派グループとの軍事対立が激化し、その影響は子どもを含む一般市民への暴力となつて命と生活を脅かしているという。暴力から逃れるために、多くの人々は避難生活を余儀なくされているが、避難民キャンプへの滞在は政府が認めていないこともあり、親戚や友人・知人宅への避難に限られている。

このような厳しい状況下では、食料や水、衛生品などの生活必需品を入手することが難しく、とくに地方に滞在する人びとは死活的な人道危機に直面している。

こうした状況は、ミャンマーの公共メディアで伝えられることはなく、国際的にも認知されていないが、多くのソーシャルメディアを通して危機的な状況が報告されているという。

日本委員会は、引き続きミャンマー委員会と力強く連携し、支援活動を行う。



WCRP 国際活動支援議員懇談会の

勉強会を開催

WCRP 国際活動支援議員懇談会の勉強会が6月14日、衆議院議員会館（東京・千代田）で開催され、国会議員、宗教者ら50人が参加し、寺島実郎氏（日本総合研究所会長）が『世界秩序と宗教』をテーマに講演した。

懇談会の共同代表は岡田克也氏（立憲民主党）、幹事長は逢沢一郎氏（自由民主党）が務め、勉強会には懇談会から、18人の国



会議員と関係者が出席した。WCRP 日本委員会からは、戸松義晴理事長、竹村牧男平和研究所所長、宍野史生特別会員（日本宗教連盟理事長）らが出席した。

寺島氏は、近代から現代にいたる歴史を77年ごとに区切り、政治、経済、宗教の動向について概観。また、日本の宗教・精神性についても語り、近代における「国家神道による国粹性」「宗教なき経済の時代」を経てきたが、これからは心の回復力としての宗教の時代による「埋没から再生へ」が重要となるとし、日本の今後の歩むべき進路を示した。

そして、現在直面している「大国の横暴」を終わらせ、世界各国の全員参加型の秩序をつくる必要があると訴えた。

今月のWCRP 新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

生罇（せいてん）

今月、「いのちの森」の安全祈願祭が開催されました。気候危機タスクフォースの委員や土地の地権者のみならず、さまざまな樹木が風で揺れる音や、野鳥、虫たちの声・囀（さえず）りが合唱となって、地球上のすべてのいのちが安全を祈願しているように感じました。

WCRPの活動

《8月》

- 2日 和解の教育タスクフォース第2回会合（東京・普門メディアセンター／オンライン併用）
- 4日 比叡山宗教サミット36周年記念「世界平和祈りの集い」
- 8日 第51回原爆殉難者慰霊祭（長崎カトリックセンター）
- 25日 ストップ！核依存タスクフォース第3回会合（オンライン開催）
- 28日 女性部会第3回委員会・学習会（オンライン開催）
- 総合企画委員会（オンライン開催）

掲載内容の無断転載を禁ず。